

1930年代フランスにおける壁画の復興

山本 友紀 (京都嵯峨芸術大学)

フランスにおける壁画は、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌやナビ派の作品を白眉とする装飾芸術の伝統を前史にもつが、1930年代に前衛芸術家たちが建築と絵画を結びつけ、芸術を大衆に近づける表現形式として捉えなおしたことにより、再評価される傾向にあった。

壁画再生の動向が頂点に達したのは、人民戦線政府のもとで開催された1937年のパリ万国博覧会においてである。パリ万博で壁画は、世界大恐慌の影響によって深刻化した芸術家たちの失業問題を打開する有効な手段としてみなされ、自国の多種多様な画家への制作依頼が広範囲になされた。そこで制作された壁画作品には、保守的傾向を示す画家たちの具象画が主流を占めるなか、フェルナン・レジェ、ロベール・ドローネー、ラウル・デュフィなど、前衛的な画家たちによる前衛色の濃い作品が少数派でありながらも含まれていた。パリ万博での諸家の作品は、特定のイデオロギーに立脚したものではなかったために、統一された様式が示されるに至らなかったのである。

しかしその一方で、万博の全体計画を取り仕切ったエドモン・ラベが指摘するように、それらの様々な方向性をもつ表現様式には、緊張感を増す世界情勢に対して向けた、平和への希望というメッセージが込められており、その意味で一つの共通意識が底流にあったことが窺える。前衛芸術家たちの壁画を通じた活動は、フランス特有のヒューマニズムの色調を必然的に帯びていったのであり、したがって、第一次世界大戦中の「秩序への回帰」に端を発する、新しい古典主義理念に沿った「フランス的」様式の確立を目指す動きとも、全く無縁に展開したわけではないとみることができる。この点に着目するならば、1937年のパリ万博とその前後における壁画に対する前衛画家たちの取り組みを吟味することで、新しい局面を迎えつつあったフランス芸術を新しい視点のもとに照らし出すことが可能であると考えられる。

本発表では、これまで十分に検討されてこなかった、サン＝モールが1935年に設立した「壁画芸術」協会とそれに関わった芸術家の活動に注目する。「壁画芸術」は、独自のサロンを開催するなど壁画に特化した実践的な活動を展開し、アメデ・オザンファンをはじめ、レジェ、ドローネー、アルベール・グレーズ、ジーノ・セヴェリーニといった、かねてから壁画の重要性を主張していた多くの前衛芸術家を会員に抱えていた。これらの前衛芸術家たちの壁画にまつわる言説のうちに、壁画を手掛かりに芸術と社会との関係を模索するなか、モダニズム的価値観が見直されていった過程をみることができるであろう。これらの考察を通じて、1930年代におけるそうした彼らの試行が、第二次世界大戦中のナチズム支配の状況下における、フランスの「伝統」を擁護する芸術運動へと継承されていた可能性を指摘したい。